

## 利行満足章

復た五種門有りて、漸次に五種の功德を成就すと知るべし。何者か五門。一には近門、二には大会衆門、三には宅門、四には屋門、五には園林遊戯地門なり

此の五種は入出の次第の相を示現し給う也。入相の中に初めに浄土に至る、是れ近相なり。謂わく、大乘正定聚に入り、阿ノクタラ三ミヤク三菩提に近ずくなり。浄土に入り已れば

便ち如来の大会衆の数に入るなり。聚の数に入り已りて、当に修行安心の宅に至るべし。宅に入り已れば、当に修行所居の屋宇に至るべし。修行成就し已りて、当に教化地に至るべし。教化地は、即ち是れ菩薩の自娯楽の地なり。是の故に出門を園林遊戯地門と称す。自利利他の行がまどかに満たされるとは、論に次のようにいわれている。

さらに五種の門がって、順次に五種の功德を成就せしめるのである。よく承知すべきである。五種の門とはどのようなものかと言えば、一には近門、二には大会衆門、三には宅門、四には屋門、五には園林遊戯地門である。

此の五種は、浄土に入り教化に出る相を順番に顕わしている。

入る相の中で、まずはじめは浄土へ至る。相をあらわしている、これが近相である。つまり、大乘の正定をえたひとびとの仲間に入って、アノクタラ三ミヤク三菩提に近づくのである。浄土に入ってしまうと、如来の説法の大会に集う衆の数に入ることになる。衆の数に入れば、心おきなく修行し、心をやすんずることができる宅にたどり着くのである。宅に入れば、修行ひとすじに居住する屋に入るのである。そして、修行が全く出来上がれば、衆生を教化する場処へと出かけるのである。その教化の場処は、菩薩が自ら進んで楽しむ場処であるから、教化に出る門のことを園林遊戯地門と言うのである。

○ 利行は自利利他の行、即ち五念門のこと。満足は成就の義。願事成就は因の五念門の往生の業事成弁したこと即ち因行の成就。此の章は因の五念門の行が果に至って成就することであり、願事成就と違って因の時修行した五念門の行が果に至って果の五門と顕れる処が因の五念門の成就。願事成就と違う故に、成就と言わず満足という也。五念門の自利利他の行が果に至って成就満足することを明かす章なるが故に利行満足と名付け給う。

\*満足は成就をあらわす。願事成就の成就と同じこと。しかしながら、そこに使い分けしてある意味は多少あるのであろう。則ち、願事成就は因について、因について成就満足。利行満足は果についていうのであろう。

○ 五種功德は、因の五念門のこと、功德と云うのは、功は功能、働きのこと、その功德は修行したところの善根の徳なり、その善根の功德を以て行者を利益する。因の時修した善根が果に至ってその功德が顕れて行者を利益する。

○ 三業の中で、身業は最も軽いから初めに置き、意業は最も重い故終わりに置く。自利は

軽く利他は重い故、三業二利 漸漸に軽きより重いきに至る次第を説いたもの。果の五門は近門より大会衆門に入り、次に宅門へ、劣れるより優れたるに向かって次第漸入の相を説く。果の第一近門では因の第一礼拝門を成じ、果の第二大会衆門で因の第二讚嘆門を成ずる。果の五門を以て因の五念門を成就することを明かす。

○ 今家では衆生往生の因果を言う時は一心五念の因をもって往生の果を得るなり。この果の中で、**近門大会聚門は此の娑婆で得る現生正定聚の利益なり**と言う。後の三門浄土に至って得るといふも他流の如く浄土に至って次第漸修して成仏の果を得るのではない。真実報土蓮華藏世界へ生ずるところで直ちにアノク菩提の仏果を成ずる故「五念門自利利他行成速得成就アノクタラ三ミヤク三菩提」と説く。されば、後の三門の利益は「願土に至れば速やかに無上涅槃を証してぞ即ち大悲をおこすなり」といふが今家の所説なり。因の五念門を以て果の五門を得ると一往言ったのは、因の五念門の行が果に至って、悉く成就する相を説いてみせる為である。

○ 因位の間には体を以て修行したる身業の功德によって果へ至って体の神境通と他心通と漏尽通との三輪の果を得るといふことあり。因位の間には体を以て修行したる身業の功德によりて果へ至って体の神通自在なる神境通を得る也。又因位の間には語に虚妄を離れて修行する故、人があの人のいふことは誠と知る、これ因位の間には我が語の誠で我が心の内の誠を人にしられるなり、此の語業の功德によって、果へ至ったところで、人の心の内を知る所の他心通を得るなり。又因位の間には心に悪を離れ善を志した意業の功德によって果に至ってあらゆる煩惱を離れる漏尽通を得る也。総じて因位の三業の行によって総じて果徳を満足するなり。今五念門と果の五門との配属もこれと同じ、因の五念門の中の第三の作願門は一心に願生する奢摩他の相じゃによりて其の作願門によって果の第三の宅門の奢摩他寂靜の果を得るといふの果を得る。因の第四の觀察門は弥陀の浄土を心に思い浮かべる。毗婆舍那の觀の相によりてその觀察門によりて果の第四の屋門の毗婆舍那の果を得る。因の五念門にも三業二利の次第を立て果の五門にも次第漸入の相を説いて漸漸に次の如く果の五門を以て因の五念門を成就する相を説く。

我が祖の論の深義を窺う時は是と違ふ也。

「二門偈」にこの論を拠り所として「菩薩入出五種門自利利他成就不可思議兆歳劫漸次成就五種門」と言えり。五念門の行は法藏菩薩因位の三業二利の行なり、そこで、この利行満足章は法藏菩薩の五念門行を以て衆生往生の果の五念門を成就し給う相を明かす也。因の五念門は「浄土論」では願生行者の五念門と見るを、我が祖は悉く点を付け替えて法藏菩薩が所修の五念門とし給う。また、果の五門は左に非ず、論註ど通りに衆生往生の果の五門とし給う。これ因行は如来の方に修し給いて果は衆生に得しめ給う。然れば、法藏菩薩の五念門で、衆生往生の果の五門を成じ給う。これ一朝一夕に成就したことではない。不可思議兆歳劫に漸次に五種の果を成就する。それを論文に「漸次成就」と説いたものと見給う。されば、「復有<sub>二</sub>五種門<sub>一</sub>漸次に成就したま<sub>えり</sub>五種の功德<sub>一</sub>より」と読むべし。【往生論註講義】

此の五種の門は、初めの四種の門は入の功德を成就す。第五門は出の功德を成就せるなり。この入出の功德は、何者か是や、釈して曰く。

此の五種の門のうち、はじめの四種の門は（浄土に）入るについての功德を成就し、第五の門は（教化に）出るについての功德を成就している。この入と出との功德とはどのようなものかと言え、次のように解き明かされている。

入第一門とは、阿弥陀仏を礼拝して、彼の国に生ぜんとするを以ての故に、安楽世界に生ずるを得。是を入第一門と名づく。仏を礼して仏国に生ぜんと願ず。是は初めの功德相なり。

入の第一門とは、阿弥陀仏を礼拝し、彼の国に生まれんとすることによって、安楽世界に生まれることが出来ることを言う。仏を礼拝して彼の国に生まれんと願うというのが、最初の功德の姿である。

入第二門とは、阿弥陀仏を讃嘆したてまつりて、名義に随順し、如来の名を称し、如来の光明智相に依りて修行せるを以ての故に、大会衆の数に入ることを得る。是を入第二門と名づく。如来の名義に依りて讃嘆する。是第二の功德相なり。

入の第二門とは、阿弥陀仏を讃えまつり、名の義に心からしたがって如来の名を称し、如来の光り明らかな智慧の相によって修行して、その徳を以て仏の説法の大会に集まる衆の仲間に入ることが出来ることを言う。如来の名の義のままに讃えまつるとというのが、第二の功德の姿である。

入第三門とは、一心に専念し作願して、彼の国生まれて奢摩他寂靜三昧の行を修するを以ての故に蓮華蔵世界に入ることが得る。是を入第三門と名づく。寂靜止を修せん為の故に、一心に彼の国に生ぜんと願ず。是れ第三の功德相なり。

入の第三門とは、一心にひたすら願いをなして彼の国に生まれ、奢摩他たる寂靜三昧の行を修することによって、（清浄な）蓮華蔵世界に入ることが出来ることを言う。寂靜止を修行せんが為に、一心に彼の国に生まれんと願うのが、第三の功德の相である。

入第四門とは、彼の妙莊嚴を専念し觀察して、毗婆舍那を修するを以ての故に、彼の処に到ることを得て、種種の法味樂を受用す。是を入第四門と名づく。種々の法味樂というは、毗婆舍那の中に、観仏国土清浄味、摂受衆生大乘味、畢竟住持不虛作味、願事起行願取仏土味有り。是の如き等の無量莊嚴仏道の味有るが故に種種と言う。是は第四門の功德相なり。

入の第四門とは、ひたすらに彼の浄土の妙なるかぎりを觀察し、毗婆舍那を修行することによって、彼の（阿弥陀仏の）処に到ることが出来、仏法についてのいろいろな楽しみを味あうことである。いろいろな仏法の味わいとは、（浄土のかぎりを觀察する）毗婆舍那には、

仏の国土をみてその清浄さにふれる味楽、一切の衆生を大乘に入れて一筋に生かしめる味楽、衆生にいつまでも功德をたもたせ（仏道から退転する様な）虚しい行為をさせぬ味楽、衆生の種類に応じて救済し、仏を供養し、自ら願ってあらゆる世界を仏の国土とする味楽などがある。このように数えきれない飾りによる仏道の味わいがあるから、「いろいろな」というのである。これが第四の功德の姿である。

出第五門というは、大慈悲を以て一切苦悩の衆生を觀察して、応化身を示して、生死の園、煩惱の林の中に回入して、神通に遊戯し教化地に至る。本願力の回向を以ての故に。是を出第五門と名づく。示応化身というは、法華經の普門示現の類の如きなり。遊戯に二義有り。一には自在の義なり。菩薩の衆生を度することは、例えば獅子の鹿を捕つに、所為憚ざるが如し、遊戯の如し。二には度無所度の義なり。菩薩、衆生は畢竟じて所有無しと觀じて、無量の衆生を度すと雖も、実は一衆生として滅度を得る者無し。度衆生を示すこと遊戯の如し。

本願力と言うは、大菩薩は、法身の中に於いて常に三昧に在して、種種の身、種種の神通、種種の説法を現ずることを示す、皆本願力を以て起こすなり。例えば阿修羅の琴の擦る者無しと雖も、音曲自然なるが如し。是を教化地の第五の功德相と名づく。

出第五の門とは、大いなる慈悲をもって苦悩するすべての衆生のすがたを觀察し、それらの衆生に応じて身を変じて生死の園である煩惱しげき世界に入り、神通をあらわして遊戯し、衆生教化を全うすると云う事である。それはもともと衆生を救済しようとする本願の力が回向されているからである。これを出の第五門と名付ける。「衆生に応じて身を変じてあらわれる」とは、「法華經」の普門品に変化身について説かれているような類の意味である。遊戯というには二つの意味がある。一つには自在と言う意味である。つまり、菩薩が衆生を救済するのは、たとえば獅子が鹿を手どりにして、どうしようがこうしようが思いのまま、全く遊びたわむれているのに似ていると云う事である。二には救済しても救済されたものはないという意味である。つまり、菩薩が衆生を觀るのは、もともと衆生と言う実体があるのではないということを観るのだから、かぎりない衆生を救済しても、真実にはひとりとして滅度をえた衆生が別にあるわけではない。このように菩薩が衆生を救済するのは、あたかも遊び戯れているようなものなのである。本願力と言うのは、大菩薩は法身のうちでつねに三昧にあつて、さまざまの身、さまざまな神通、さまざまな説法を表すが、これはすべて本願の力によって起こすのだと云う事である。たとえば阿修羅の琴は弾く者がなくても、自然と音楽が奏でられるというようなものである。これを「教化ということがかなえられる第五の功德のすがた」と名付けるのである。

菩薩は入四種の門をして自利の行成就すと知るべし。成就とは、謂く自利満足なり。

応知というは、謂く、自利に由る故に則ち能く利他す。是れ自利するに能わずして能く利他するに非ずと知るべしとなり。

菩薩は（浄土に）入る四種の門によって自利の修行を成就する。このことをよく承知すべ

きである。「成就する」とは、菩薩自身のための行が完全に成し遂げられたことを言う。「よく承知すべきだ」とは、自利することがあるからよく利他することが出来るのであって、自利することが出来なくて利他することができるということとはありえない、ということをよく承知すべきだというのである。

**菩薩は出第五門の回向利益他の行成就したまえりと知るべし。成就とは、謂わく、回向の因を以て教化地の果を証す。若しは因、若しは果、一事として利他するに能わざること有ること無しとなり。応知というは、謂わく、利他に由るが故に即ち能く自利す。是れ利他するに能わずして能く自利するには非ずと知るべしとなり。**

菩薩は（教化に）出る第五の門に依って、（自分の功德を）回向して衆生を利益する行を成就するのである。このことをよく承知すべきだというのである。「成就する」とは、（功德を他に）回向するという因の修行によって、あまねく衆生を教化することができるという結果が実現されたことを言う。このように因であっても果であっても、何一つとして衆生を利益するためでないものはない。「よく承知すべきだ」とは、利他することがあるから自利することが出来るのであって、利他することができなくて自利することができるのではない、ということをよく承知すべきだというのである。

- 奢摩他—止息、寂靜、（散乱した心を離れ思いを止めて心が寂靜になること）
- 毗婆舍那—觀法（心に心理、法を觀察する実践修行）
- 阿ノク多羅三ミヤク三菩提—無上正遍道、仏の覺智は迷いを離れて円満し真理に於いて知らぬところなく無上であること）
- 蓮華藏世界—阿弥陀選択の本願に酬報した安樂淨土、一切の如来自覺自證の土
- 觀仏国土清淨味—仏の国土を觀ずるに清淨なる味を得るの意
- 摂受衆生大乘味—大義門功德、衆生を摂受して大乘一味ならしめる
- 畢竟住持不虛作味—不虛作住持功德、衆生をいつまでも淨土の功德に住持せしめて不虛作成る法味樂
- 類事起行願取仏土味—衆生それぞれの性向にしたがって仏事をなすこと
- 度無所度義—一切衆生を度して滅度にいたらしめ給うに一衆生として実滅の者ある事無し、不生不滅の理
- 自娛樂—自らが楽しむことによって、おのずと他が化せられること。

**\*三業二利**

- 礼拝—身業
- 讚嘆—口業
- 作願—入（自利）
- 觀察—意業
- 回向・・・・・出（利他）

二利の行を成就することによって無上菩提を成就する。無上菩提は自利利他円満と言うこ

と、五念門の自利利他を満足することによって、そのことがやがて無上仏道を満足することになるわけである。五念門の二利の行を満足するために果の五門を別に立てる。果の五門によって五念門の行を満足成就することを表してある。無上仏道の果は自利利他円満の果でもある。五念門を満足するのを無上仏道の因に約してあかさされ、同時に二利の行の満足を述べるのに果の五門をもって示される。果の五門、即ち無上菩提の果である。

「また五種の門ありて」という「また」は、重複のこと、もう一つ門をかさねるという意である。別に「五種の門」をたてて五種の功德を成就するのである。「五種の門」は、五功德門である。五門によって五念門の行の功德を成就することを表す。果の功德をもって、そのよってきたる行を明かす。功德とは、行によって勝ち取ったもの、行の働きである。功德は善を行づることによって成り立つ。五功德門によって五念門の徳を成就するのである。果の五門によって因の五念門の行徳を成就する。果の五門を因の外にたててあるから「また」とあるのである。つまり、果で因を成就する。このような思考法はインド的であるが、大切なことである。水を飲んで渴きを癒されたことによって水の持つ徳を成就する。論の思考は普通の考えと違うのである。本願は助ける徳があるということは助かった人によっていえることで、助けられた人だけが助ける本願を成就するのである。飲んだことで水の徳を表すのが五門、この味は飲んでみるより仕方がない。比喻しかない。

五念門の行は第一願偈体意、第二起観生信とあったが、起観生信の方法として、願偈大意よりおこして五念門が出されてある。それをうけて以下次第に五念門の行が展開される。第三観察体相は五念門の行の中の観察が大切であるからである。このようにして第九願事成就まで五念門の行が来ている。願偈大意のはじめに願生の願が出たので。次の起観生信で五念門の行が出た。この行を広く述べて、第九願事成就で、願事の願は願生の願である。つまり、願より行を開き、願によって行が成就した。五念門の行は願生より出た。そして五念門の行によって願生が成就した。そこには四心といった心の問題が出されてきた。四心を通して五念門の行によって願生の事業が成就した。願事成就は因が成就したということ。内よりは四心、外よりは五念門の行、つまり因が成就した。今度は五念門の行の功德を明かすのである。五念門の行の功德を成就するために五種の門を開いた。

次に第三観察体相、第四浄入願心、第五善功摂化と出されていたが、五念門の中で観察が最も大切である。その帰結として浄入願心を明かされた。つまり観察で、清浄願心に触れる。清浄願心に触れて第五善功摂化がある。その善功摂化のところで初めて菩薩の名が出る。善功摂化は菩薩のはたらきである。このように第二起観生信では善男子・善女人の名、第五善功摂化では菩薩の名で出る。その間に第三観察体相を通して浄入願心が明かされてくる。是が如来因位の願心である。このように善男子・善女人が如来の願心に触れてくるところに菩薩となるわけである。よって第三観察体相、第四浄入願心は菩薩を生み出す母胎である。このように善功摂化で菩薩が出てくるが、そのもとは浄入願心にある。この意味で観がいかにかに大切であるかがわかる。本願に帰する、念佛に帰する、つまり念仏に於いて本願に触れる。触れると自ら善男子・善女人をして菩薩道を成就せしめる。そのことを願事成就で結んであ

る。今度はこの菩薩道を通して利行満足を表すのである。利行満足では仏道の果に即して菩薩道を説明する。このようにして無上菩提に徹してくる。五念門の行を明かすために改めて五門を立てられるのはこのようなわけである。(教行信証証卷聴記三)